

2012 年度 第 5 回 全体研究会
「エンゲイジド・ブディズムの潮流」 (第 2 回)

報告題目 小僧伝——現場の声を聞く仏教人類学
開催日時 2012 年 7 月 24 日 (火) 17:00–19:00
開催場所 龍谷大学大宮学舎 清風館 3 階 301 教室
報告者 Mark ROWE (マックマスター大学准教授)
ファシリテーター 桂 紹隆 (龍谷大学文学部教授・BARC センター長)
コメンテーター 佐藤智水 (龍谷大学文学部教授)
参加者 41 人

【報告のポイント】

マーク・ロウ氏は、現代日本において、一般的な「僧侶」によって如何に仏教が営まれているのか、またその活動は具体的に如何なるものなのかについて、200 人以上の僧侶へのインタビューを通して研究を進めてきた学者である。本報告では、日本の伝統宗門が直面する問題とそれに取り組む数人の僧侶が紹介され、ロウ氏自身の感想として、それらの問題を克服する上で必要な事柄も述べられた。

【報告の概要】

現代日本仏教の研究者は、「今の仏教は本当の仏教でなく、形だけの仏教だ」としばしば述べる。このような仏教の見方は、学問的な場においては歴史学者の辻善之助 (1877–1955) などによって普及し、「葬式仏教」を否定的に捉える一般のメディアによっても後押しされてきた。しかし、現在の仏教をその「墮落形態」として考えるため、規範的な判断も必要となる。果たして、「真正な仏教」が存在したのはいつなのか。それからの「墮落」はいつ始まったのか。そしてその「墮落」の程度は、誰が測るのか。ロウ氏は、そういった規範的な回答を示すよりも、そのような「墮落説」は現代日本仏教のイメージ拡大において、如何に機能しているのか、ということについて関心を有していると述べた。

そういった基本的な立場を語った上で、ロウ氏は 2011 年に刊行された自著『死者の縁——寺院、葬式、および現代日本仏教の変質』 (*Bonds of the Dead: Temples, Burial, and the Transformation of Contemporary Japanese Buddhism*, University of Chicago Press) の成果を概述した。そこでは、「ポスト檀家仏教」の課題、現実寺院における「教理」、宗派内の「寺

院」の位置づけ、宗派の知識人の役割、などの事柄が考察されているが、ロウ氏の主な目的とは、葬祭に関する問題の多様な側面に焦点を当てることであつた。つまり、少子化・過疎化・個人化、そして拡大しつつある葬儀屋の勢力は、如何に仏教を変えているのか、如何なる疑問を僧侶にもたらしているのか、などについて、現場の観点から考えようとした。要するに、一般僧侶は、自らがその枠組で育てられた「仏教」、自らが高等教育機関で勉強した「仏教」、自らが僧籍などの獲得のために修行した「仏教」、そして自らが生活する寺院における日常の「仏教」など、その様々な「仏教」と如何にして直面しているのか、ということである。

ロウ氏はそのような基本的な関心を踏まえて、現在のプロジェクト、すなわち大多数の一般的な僧侶へのインタビューを収集する「小僧伝」を始めたというのである。それはいうまでもなく、「高僧」の生涯を仏教者の「規範」として捉えようとする仏教の伝統の相対化を試みる発想であり、「真正」というよりも「実際」の仏教の民族誌的叙述を目指したものである。ロウ氏は、現在、宗派を問わず日本全国の様々な僧（尼）へのインタビューを行っているところであり、その成果を将来、書籍という形式で公表するという。それらのインタビューを行うまでのプロセスなど、ロウ氏が「仏教人類学者」として直面する様々な問題が生き生きと述べられ、フィールドワーク論としても学ぶべきところが少なからず示された。

結論として、ロウ氏は再び、「真正な仏教とは何か」、という疑問を投げかけた。その答えを過去に求めるような態度は、現代特有のものではなく、いわゆる原始仏教の枠組においてすでに見出すことができるという。過去に宗教的な理想を求めて、想像された形をもとにして「仏教」にまつわる言説を展開するような「墮落説」は、結局、現状を直視することの回避にもつながるといえよう。経典や祖師の著作にみるような「仏教」とは、最初から「事実」ではなく、「理想」であることを忘れてはならない——これは、ファストフードのチェーンがその宣伝のために用いるハンバーガーの写真と、その実物との差異のようなものである。

ただ、日本の宗門は、危機的な状態に陥っていることもまた事実であり、多くの寺院は廃されたり、合併などに追い込まれたりしている。しかしこれは、目前の仏教が「真正」なそれではないという発想とは、また異なる次元の問題であり、学者が定義する「仏教」と、生活に密着している「仏教」とは、関係しつつも異質なものであると考えなければならぬとロウ氏は指摘した。

【議論の概要】

中国仏教史が専門である佐藤氏は、同国において廃仏が 4 回も行われたことを指摘し、その都度、廃仏の原因として教団の墮落が挙げられたという。ただし、それぞれの時代の廃仏を進めた皇帝がいなくなると、仏教は再び復活したという。佐藤氏は、その 4 人の皇帝はなぜ廃仏政策を展開したかという、彼らは社会の在り様に対する認識を間違えたからだという。彼ら皇帝は、社会の様々な矛盾や問題の原因が僧侶にあると捉えたが、人々はそう捉えていなかったからこそ仏教が後に復活したと佐藤氏は主張する。仏教と民衆との関わりを顧みないで、仏教の姿を「墮落」と捉えて、弾圧する皇帝の政策論を考えると、ロウ氏の講演が示唆深いという。それに対してロウ氏は、「墮落説」について再び触れ、現在の仏教を常に「墮落形態」として捉えることの問題を指摘した。

フロアからは、今の日本仏教は「危ない」というロウ氏の話を受けて、どこが最も危ないのか、という質問があり、それに対してロウ氏は、過疎化に伴う廃寺・合寺と、そこから生じる寺院と檀家との関係の希薄化、さらにそれがもたらす離檀などについて指摘した。そのような状況のなかに生きていかなければならない若い僧侶の精神的苦悩なども、今後、考慮する必要があるという。これは、僧侶の育成という、より大きな要素と関連しており、現代における宗門の在り方の構造的な問題のひとつである。

